

【TS性転換】魔法少女に堕とされて。ゝ悪の組織のボスに毎夜めちやくちやに愛される件ゝ【シオン編】

その夜、街はしんと静まり返り、深い眠りに落ちたかのようだった。ただ野良猫だけが路地裏を器用にすり抜け、時折、赤ん坊の泣き声のような鳴き声を響かせている。

空はどんよりと暗く、低く垂れ込めた雲が月光を遮り、薄暗い街灯と故障して明滅を繰り返す信号機だけが、辛うじて周囲を照らしていた。

空きアルミ缶が風に吹かれて路面を転がり、カラカラと騒がしい音を立てる。それがかえって、ヒールの着地音をかき消してくれた。

彷徨っていた野良猫は、高いコンクリート壁の上に立つ紫色の人影を目撃した。だが、彼女がそこに留まったのはほんの一瞬だった。次の瞬間、何かをロックオンしたかのように、彼女は躊躇なく足を踏み出し、猛烈な勢いで駆け出した。

その身のこなしは極めて鮮やかで、幅の狭い壁の上をまるで平地であるかのように走り抜け、わずかなブレもバランスの崩れも見せない。腰の後ろに結ばれたリボンの帯が風に煽られて激しくはためき、一瞬、紫色の光が閃いたかのような錯覚さえ抱かせる。

放置された一棟のビルの前で彼女が足を止めると、傍らの街灯がようやくその姿を鮮明に浮かび上がらせた。

見た目の年齢は十七歳といったところの少女だ。長い睫毛に、潤いを帯びたピンクパープルの大きな瞳。顔立ちは甘く、まだどこか幼さ

を残しており、艶やかな紫色の髪は低い位置でツインテールに結ばれている。

少女はまるでコスプレのような華やかな紫色のドレスを身にまとっていた。胸元は深く開いており、柔らかく白い二つのふくらみが今にもこぼれ落ちそうだ。

膝上まであるロングブーツを履いているため、スカートの裾とブーツの間から覗く絶対領域の白い太ももが際立つて目を引く。そこには、少し肉感的な柔らかさがあった。

「こちらはシオン」

少女は耳に装着したインカムを押さえ、その桜色の唇から、キャンディが溶けたような甘く、とろけるような声を漏らした。

「目的地に到着したわ。ターゲットが本当にここにいるのは確実な

の？」

『そうだよー、ひやくば一せんとお墨付き！』

応答したのは、インカムを突き破らんばかりの、興奮に満ちた甲高い子供の声だった。

「たかが中級の怪人一匹に、そこまで興奮する必要ある？」

シオンは、その甘い容姿にはおよそ似つかわしくない冷笑を漏らした。

『初級だろうが中級だろうが上級だろうが、怪人なら全部倒さなきゃダメなんだよー！それが魔法少女の義務でしょ！』

子供の声がもつともらしく主張する。

「これ倒したらいくらになるか、直接現実的な数字を教えてもらった方が話が早いわ」

シオンは相手の戯言に付き合うのが煩わしくなり、右手をひるがえした。すると、彼女の身長半分ほどもある華美な魔法杖が、虚空から手のひらに現れた。

インカムからある数字が告げられると、シオンは満足そうに頷いた。真夜中に寝もせず、冷たい風に吹かれながら怪人を追跡してきた甲斐があつたというものだ。

魔法少女は、愛と正義だけで維持できるほど甘い職業ではない。働いた分の労働には、相応の報酬が支払われるべきなのだ。

たとえマスコットがどれほど愛くるしい姿をしていようと、彼女のこの信念が揺らぐことはない。

ましてや、自分と契約を交わした相手は、丸々と太っていて今すぐにでも鍋に放り込めそうなペンギンなのだから。

シオンはさらにいくつかの質問を重ね、ターゲットが下着専門の窃盗魔である中級怪人だと確認した。このビルを潜伏先に選んだ理由は、一つには長く放置されていること、もう一つは内部が十分に広く、戦利品を思う存分展示できるからだという。

「ただの変態じゃない」

シオンは眉をひそめた。

彼女には下に四人の妹がいるため、この手の事案には人一倍敏感だった。このような卑劣な行いをするクズを、到底許すわけにはいかない。

インカムを切ると、シオンは半分ほど閉まったシャッターの下から身を屈めて侵入した。視界に広がるのはただ一面の闇、そして鼻を突く湿っぽい臭いだ。

一寸先も見えない暗闇の中にありながら、彼女は微塵も緊張の気配を見せなかった。魔法杖の先端が柔らかな光を放ち、それが前方へと一気に広がると、瞬時に半径十メートルの範囲を照らし出した。

範囲としては決して広くはないが、夜視能力に長けたシオンにはこれで十分だった。彼女は素早く周囲を見回す。

かつては倉庫として使われていたのだろうか。周囲には棚がいくつも並んでおり、四角い金属の輪郭が魔法杖の光を浴びて鈍い光を反射している。壁一面に広がった赤黒い錆が薄っすらと見え、ひび割れたコンクリートの壁や、天井から剥き出しになった鉄筋と相まって、独特の退廃美を醸し出していた。

こういう環境を探索するのが好きで、それを「廃墟美」と呼ぶ人間がいることをシオンも知っている。

惜しむらくは、そこが下着泥棒の中級怪人のコレクションルームに成り下がっていることだが。

敵の下劣な趣味に思い至ると、シオンの瞳に鋭い光が宿り、その甘い顔立ちにどこか殺伐とした気配が加わった。

一階には誰もいない。二階にも誰もいない。上へ進むにつれて、並んでいる棚は乱雑さを増し、床に横倒しになって進行の障害となっているものも少なくなかった。だが、それはあくまで常人の話だ。

シオンの動きは猫のように軽やかで、一瞬の滞りもなく、瞬く間に最上階へとたどり着いた。

しかし、想像していたような下着が風にたなびく光景はどこにもなかった。雲の切れ間から覗いた月が室内に青白い光を投げかけ、魔法杖の光と合わさることで、シオンの目は中央に佇む人影を捉えた。

足首にまで達するピンク色の髪が滝のように流れ落ちており、一見ただけでは男か女か判別がつかない。

シオンはそれをただのピンク色の海藻の塊とでも思おうとしたが、あいにく、うなじを突如として駆け抜けた戦慄が、彼女の内に不吉な予感呼び起こした。

（ちくしょう、これのどこが中級怪人よ……！）

シオンは、あの見立て違いをしたマスコットを一本背負いで投げ飛ばしてやりたい衝動に駆られた。中ボスをすっ飛ばして、いきなりラストボス戦に突入したようなものだ。

そのピンク色の海藻がどんな面構えをしているのかまだ分からなかったが、シオンは危険に対して野生動物並みの直感を持っていた。彼女は魔法杖を固く握りしめ、相手に気付かれないうちに撤退しようと、

音もなく後退を試みた――が、次の瞬間、視界が唐突に天地をひっくり返した。

何物かが彼女の足首をがっちりと絡め取り、不意を突かれた彼女の身体をフロアの中央、すなわちピンク色の長髪の人影の背後へと引きずり込んだのだ。

続いて、両手までもが絡め縛られ、重ね合わされた状態で頭上へと垂直に吊り上げられた。わずか数秒の間に、彼女の身体は完全に宙吊りにされ、魔法杖が床にドンと音を立てて転がった。

「しまっ――！」

シオンは内心で驚愕したものの、その甘い顔立ちに恐怖の色を浮かべることはなく、即座に自身の置かれた状況を確認した。両手足を縛り付けているのは、一見すると柔らかそうな布の帯だったが、どれほど力を込めても引きちぎることはできなかった。

ピンク色の海藻……いや、クソ、もう海藻なんて呼んでいられない。それはピンク色の長髪を持つ男だった。容姿は妖艶で、作り込まれすぎた琥珀色の瞳を持ち、右目の下には泣きぼくろがある。その表情は物憂げなものの、その眉間には冷徹な嫌悪感が滲んでいた。

シオンは、その感情が自分に向けられたものであることに敏感に気付いた。だが、なぜだ？彼とはこれが初対面のはずなのに。

「お前が、あいつらの探している花嫁候補か？」

男の声はその容姿と同様に艶麗で、気だるげにシオンを頭からつま先まで品定めするように見つめると、**小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。*まるで荷物でも検品するかのようなその視線はシオンを不快にさせたが、彼女は短い言葉から二つのキーワードを掴み取った。

『あいつら』。『花嫁候補』。

何か臆気な思考が脳裏をよぎったが、あまりにも一瞬のこととて掴みきれず、また目の前の状況が彼女にそれ以上の思考を許さなかった。彼女は布を引っ張る動きを止め、男をまるで狂人でも見るかのような目で見据えた。

「頭のネジでもぶっ飛んでるんじゃないの？このアタシを花嫁候補？脳みそ叩き割って、中身が正常かどうか確かめてあげましょうか？」

「女の子が『アタシ』だなんて、そんな乱暴な口調はいけないな」

男は溜息を吐くような声を漏らした。

「あんたに関係ないでしょ！」

シオンは歯を剥き出して笑い、その表情に獰猛さを滲ませた。しかし、その凄みも、彼女の甘く柔らかい顔立ちのせいで、相手の目にはまるで子猫がじゃれついて威嚇しているようにしか映らないというこ

とを、彼女は知る由もない。

ピンク色の長髪の男は、低く声を立てて笑った。夜の闇に響くチェロの音色のように、シオンの耳をくすぐる。その響きに、彼女の背中を突如として凄まじい悪寒が駆け抜けた。

（うわ……鳥肌が立ちまくりそう……）

男は足先で床の魔法杖を引っ掛け、上方へと放り投げると、それを手の中に収めた。白魚のようにすらりとした指先でその表面を愛撫するように撫で、次いで器用に一回転させると、魔法杖を逆手に持ち替えた。

細長い杖の身がミニスカートをめくり上げ、その先端が下着に押し当てられた瞬間、シオンは信じられないといった様子で目を見開いた。

※顔にカッと熱いものが上り、恥ずかしさと怒りが爆発する。※放た

れる視線の刃は実體化せんばかりで、男を今すぐ八つ裂きにしてやりたいほどだった。

「このド変態、人間のクズ、最低男っ！」

彼女は必死に太ももを閉じようとしたが、あいにく足首の布は彼女の意志に反抗し、二本の白い脚を容赦なく左右に引き裂いた。スカートの中の光景が、あからさまに晒し出される。

白い綿製の下着が魔法杖に押されてわずかに窪み、それに伴って、少女の下半身の扇情的な輪郭が強調された。特に、特有の柔らかな割れ目のふくらみが、ちょうど杖の先端を挟み込む形になっており、男の腕がほんの少しでも力を加えれば、そこから弾けるような、異質な痺れが全身を駆け巡ることは明白だった。

シオンの顔が次第に赤く火照っていくのとは対照的に、男の表情は

相変わらず気だるげで冷淡なままだった。まるで、ただの気まぐれな戯れに過ぎず、心に留める価値すらないと言わんばかりに。

シオンの喉の奥が愛撫されるようにむず痒くなり、油断すれば今にも声が飛び出してしまいそうだった。彼女は眼下の男を睨みつけた。この、双方の圧倒的な温度差が、底知れなく気に入らなかった。自分は熱に浮かされて耐え難いというのに、相手は冷徹に傍観している。その事実が、彼女に「完全に屈服させられている」という、耐え難い不快感を抱かせるのだった。

シオンは口内を強く噛みちぎった。たちまち鉄のような錆びた匂いが広がり、鋭い痛みが下腹部から込み上げてきた突然の疼きを力ずくで押さえ込む。魔法杖の先端がさらに深くその窪みへと押し込まれても、シオンはすべての喘ぎ声を頑なに飲み込んだ。両頬は依然として

緋色に染まったままであったが、その薄紫色の瞳には、いよいよ凶暴な光が満ちていく。縛り付ける布さえ緩めば、今すぐにでも飛びかかって相手を噛み殺さんばかりの勢いだった。

「へえ、いい執念だ」

男の低く滑らかな声から、ようやく退屈の色が消えた。同時に、宙吊りにされていたシオンの身体が不意に一段低く落とされる。

ふくよかな胸のふくらみを男の指先がかすめて通り過ぎた。シオンの身体がびくりと跳ねる。未だかつて味わったことのない快感が背骨を駆け抜け、彼女は信じられないといった様子で目を見開いた。それは、下着越しに魔法杖で擦られたときよりも、数倍も強烈な快楽だった。

「胸がそんなに敏感だったとはね」

男は面白い玩具を見つけたかのように、肉感的な白い胸の肉を厭らしく指で弄び、何度かドレスの布地を撥ね退けそうになった。ピンク色の蕾が、見え隠れする。

シオンは羞恥のあまり死んでしまいたかったが、もう罵詈雑言を返す余裕さえなかった。みつともない声を漏らさないためには、唇を強く噛み締めているのが精一杯だった。この身体の胸は、自分の想像を遥かに超えて敏感だった。男が服の上から尖端を指先でつまみ、悪意を込めてじつくりと捏ねるように擦り寄せると、シオンは堪えきれず、鼻から甘ったるい嬌声を漏らしてしまった。

「ほらご覧、下着がもう濡れているよ。そんなに気持ちがいいのかい？」

男が魔法杖でスカートを高くめくり上げると、そこには小さく水に

滲んだシミが浮き出た下着が晒されていた。

（クソっ……！！）

シオンは両腕を引っ張った。束縛は引きちぎれず、男からは見えな
いかもしれないと分かっているけれども、意地でも中指を突き立てて応えて
やった。

その時、耳元のインカムが突如として鳴り響いた。

『クロトビ、到着』

どこか冷徹さを含んだ簡潔な声が響いた直後、鋭い風切り音が、疾
風迅雷の勢いで男の向こうへと襲いかかった。

男は瞬時に気怠げな表情を引っ込め、後ろへと跳躍した。一撃を外
した長鞭が床を叩き、頭皮が痺れるほどに鋭い音を立てて砕けた石片
を飛び散らせる。

間髪入れず、鞭は鋭い角度で軌道を変え、今度はシオンの方へと向けられた。鞭の先端に金属の光沢が閃いたかと思うと、一瞬で鉄線のように硬質化し、彼女の手首と足首を縛り付けていた布の帯を容易く切り裂いた。

ピンク色の長髪の男はすでに脇へと退き、シオンとの距離を取っていた。彼はシオンの傍らに幻影のごとく現れた黒い人影を見つめ、その妖艶な顔に嫌悪感を走らせた。

しかし、視線を再びシオンへと戻したとき、その整った眉と目元には挑発的な笑みが浮かんでいた。彼は手元にあった魔法杖をシオンの方へと放り投げる。

「これからその杖を使うたびに、自分の武器で下着を濡らした瞬間のことを思い出すんじゃないかな？」

「思い、出す、わけ、ないでしょ」

先ほどまで男に玩具として弄ばれていた魔法杖を見つめながら、シオンは左手と右手でその両端を掴んだ。そして男を挑発するように見据え、膝の上に杖をあてがうと、力任せに内側へとへし折った――。

容赦のない力技での破壊だ。

「アタシの魔法杖がそれ一本だけだとも思った？勘違いしないでよね」

シオンは二つに折れた魔法杖を容赦なく脇へ投げ捨て、男に向けて力強く中指を立てた。その眼光は狼のように猛々しい。

「アタシの魔法杖なんていくらでもあるのよ。次にあんたが手を触れたら、それごとぶっ折ってあげるわ！ついでにあんたのその下半身のモノも一緒にね！」

その粗暴極まりない啖呵に男は一瞬呆氣に取られたが、すぐにその美しい唇を歪め、目眩がするほどに艶やかな笑みを咲かせた。彼女を見るその瞳には、どこか熱を帯びた称賛の色すら混じっている。

「本当に可愛い子だ。次はぜひデートでもしよう。廃墟探索には興味があるかい？」

「死ね」

シオンは冷酷に二文字だけを吐き捨てた。